

平成 30 年 6 月 1 日現在

機関番号：15301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2013～2017

課題番号：25370086

研究課題名(和文)フロイト精神分析の成立に関する基盤的研究

研究課題名(英文)Basic Studies on the Foundation of Sigmund Freud's Psychoanalysis

研究代表者

金関 猛 (Kanaseki, Takeshi)

岡山大学・社会文化科学研究科・教授

研究者番号：20144727

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,700,000円

研究成果の概要(和文)：フロイトが「精神分析」という用語をはじめて用いたのは40歳のときである。それまでフロイトは医学者としておもに神経学の研究に携わっていた。フロイトがウィーン大学生であったときに専攻したのも医学である。それまでの専門と精神分析とは隔たりがあるように見える。しかし、本研究においては、精神分析の基盤がすでにフロイトの学生時代に形成されていたことを明らかにした。ウィーン大学医学部における、徹底した実証主義研究が精神分析の根幹をなすのである。

研究成果の概要(英文)：Sigmund Freud first used the term psychoanalysis at the age of 40. Until then he was mainly known as a neurologist and his research achievements were highly evaluated in the medical world. It seems as if there were a gap between his scientific activities as a neurologist and the foundation of psychoanalysis. The present research revealed that the basis of psychoanalysis was already formed when he began to study medicine at the University of Vienna as a student. His mentor was Professor Bruecke who was one of the most influential physicians in Europe. Freud persuaded strict scientific method under his guidance. The basis of psychoanalysis was the scientific positivism which Freud acquired in Bruecke's physiological laboratory as a Viennese student.

研究分野：思想史

キーワード：精神分析 ジークムント・フロイト 医学史 ウィーン文化

1. 研究開始当初の背景

日本における精神分析研究は英語圏での精神分析、フランスにおける精神分析、とりわけラカン派の理論の研究が中心を占めてきた。しかし、そもそも精神分析の始祖であるフロイトはウィーンで活動し、ドイツ語で著作を書き、ドイツ語で思想を展開していたのである。そのフロイトその人に立ち返った精神分析のドイツ語による研究は、日本ではいまだ十分になされていないという現状がある。ドイツ語の原典に基づく、本格的なフロイト研究は、もちろん皆無ではないが、やはり例外的と言わざるをえない。さらに、フロイトが「精神分析」という術語を用いたのは、40歳のときである。そのため、当然のことではあるが、フロイト研究は総じてそれ以降の著作を対象とした研究に重きが置かれている。こうした状況の中で、本研究代表者はドイツ語によるフロイト研究を志し、さまざまな視点からフロイト精神分析を考察する論文を発表してきた。また、フロイトの主要著作(『失語論』、『ヒステリー研究<初版>』、『夢解釈』など)の翻訳にも取り組み、それらを一般書として刊行した。このようにしてドイツ語原典に基づくフロイト理解を深めてきた本研究代表者は、その研究をさらに深化させ、「精神分析以前」のフロイトに注目し、そのことによって精神分析の根幹を明らかにすべく本研究を開始した。

2. 研究の目的

フロイトは自らの精神分析を「無意識の科学」と定義し、それが「科学」たることを強調する。精神分析は確かに神経症の治療法という側面もあるが、フロイトが重視するのは、科学としての精神分析である。しかし、精神分析には、まさにこの点について批判が向けられる。精神分析には実証可能な科学的根拠が乏しく、それは非科学的であり、あるいは、似非科学であると批判されるのである。本研究においては、フロイト精神分析の始点をフロイトの学生時代にまで遡って探り、精神分析の創始者がそもそもどういった志向を抱いて研究に取り組んでいたのかを明らかにしようとした。すなわち、精神分析の科学性を検証するとともに、20世紀を席卷した精神分析がどういった歴史的背景のもとで成立したのかを明らかにするのが本研究の目的である。

3. 研究の方法

厳密な文献学的方法によって、本研究を遂行した。ウィーン大学医学部に大学生として在籍していたフロイトが執筆した論文をはじめ、その師ブリュッケ教授の講義録など、あらゆる一次文献を収集し、それを精読した。収集にあたっては、インターネットによって徹底的に情報を収集し、国内で入手可能な文献は、国内図書館で、また不可能なものについては、ウィーンとロンドンに赴いて収集に

努めた。1880年代以降の文献に基づく本研究は医学史ともかかわる。また、医学に限らず、ウィーン大学の読書協会に関する資料、ウィーン市の統計年鑑等々の資料に依拠した研究も行ったので、本研究にはウィーン文化史研究という側面もある。こうした文献研究、とりわけ一次文献による実証を本研究の方法とした。

4. 研究成果

本研究の前半部の成果は著書『ウィーン大学生フロイト 精神分析の始点』にまとめられた。この著書においては、フロイトが弱冠20歳で発表したヤツメウナギの神経系に関する論文が当時の学界で注目を集め、数々の論文で引用されていたことについて論じるとともに、この論文によってフロイトが目指していたのがダーウィンの進化論を実証することであったことを明らかにした。つまり、フロイトにとって進化論はダーウィニズムという観念としてあったのではなく、顕微鏡研究を通じて立証されるべきものだったのである。こうした姿勢で研究に取り組むフロイトは、その師ブリュッケに高く評価され、またフロイトも生涯にわたって師を敬愛し、ブリュッケの没後も師への尊崇の念を言葉で表している。こうした尊敬は師がそれに値する人間性をそなえた人物であったからこそ生まれたものではあるが、しかし、それにはとどまらない。ブリュッケの講義録には、フロイトの後年の「死の衝動」、「生の衝動」(*Jenseits des Lustprinzips*)を先取りするような発想を見いだすことができる。また、ブリュッケの生理学研究所の助手を務めていたエクスナーの著作で論じられる知覚と表象に関する神経学的考察は、『ヒステリー研究』の共著者プロイアーを介して、さらにフロイトの『夢解釈』にまで受け継がれるのである。フロイト精神分析の始点は、ブリュッケのもとにおける厳密な実証研究にあった。このことを立証できたことがこの著書の1つの成果である。

またその反面、フロイトは医学研究にばかり専心していたのではない。哲学の講義にも熱心に出席していた。そのときの哲学教授は現象学の祖ブレンターノである。フロイトは友人パーネトとともにその私宅を訪れてブレンターノと言葉を交わし、その教えを受けている。ブレンターノとのかかわりについて、フロイトは別の友人に詳しく手紙を書き送っている。そこから明らかになるのは、この哲学者への敬愛と、それと同時に哲学への距離感である。精神分析は哲学的思索ではなく、やはり自然科学的実証主義を基盤としていたのだ。

フロイトの友人パーネトはニーチェと交友関係にあった。ニーチェとパーネトの交友について論じることで、フロイトとニーチェの関係について考察した。パーネトはニーチェとの交友の模様を自分の婚約者に手紙で

書き送っている。その書簡は 2007 年刊行のパーネットの自伝に収録された。パーネットとニーチェの関係、またそれを介したフロイトとニーチェの関係について論じたのは、少なくとも日本語では本書が最初である。

このようにしてフロイト精神分析の始点に関する数多くの発見を含む本書は今後の本格的なフロイト研究の基本文献となりうる。また、これにより、フロイトをめぐるさまざまな誤解を払拭するものと期待できる。本書については、出版直後の 2015 年 5 月 3 日に読売新聞に岡ノ谷一夫氏による書評、5 月 17 日に朝日新聞に佐倉統氏による書評が掲載された。いずれも非常に高い評価がなされている。さらに、それから約 2 年後の 2017 年 5 月 28 日には本書にオーストリア文学会から学会賞が授与された。

『ウィーン大学生フロイト』の出版後は、ウィーン大学卒業後のフロイトに関する研究を継続し、所属機関の紀要に論文を発表するとともに、所属学会等で研究発表を行った。これが本研究の後半部である。フロイトは卒業後もブリュッケ教授の生理学研究所で研究を続けるが、しかし、研究所ではポストを得ることはできず、経済的に自立しうる見通しはなかった。そういった状態で 1 年が経った頃にフロイトはのちに夫人となるマルタ・ベルナイスと知り合う。2 人はたちまち恋に落ち、秘密の婚約をする。それを機にフロイトは研究所を去り、病院で医師としての研修を始める。ところが、婚約ののちすぐにマルタは母に強いられて、故郷のハンプルクへ引っ越さねばならなくなった。そして、結婚までの 4 年 3 ヶ月のあいだにウィーンとハンプルクに引き裂かれた 2 人は熱烈な文通を交わしていた。その全 1539 通の手紙が書簡集『婚約書簡』(Brautbriefe)として刊行され始めたのは、2011 年である。全 5 巻で完結予定であるが、目下のところ 3 巻までしか刊行されていない。しかし、これはフロイト研究に決定的な価値をもつ新資料である。これについての本格的な研究は、この書簡集の编者によるもの以外はまったくなされていない。本研究代表者は、この書簡集を対象として、ウィーン大学卒業後のフロイトに関して、研究を継続した。現時点で、印刷中のものも含め、これについて 5 本の論文を発表している。

この書簡集の価値は、まず第 1 にフロイトの主著『夢解釈』のエビデンスとなりうるというところにある。この著作でフロイトは自らの夢を分析する。夢の内容から想起されるさまざまな過去の出来事を書きつけるのだが、著者の体験について、『夢解釈』の内部でその真偽を明らかにすることはできない。しかし、『婚約書簡』には日々の些細な出来事が記されており、『夢解釈』で語られることとの一致を見いだすことができる。ここからは、フロイトが誠実に自己分析をしていたことが明らかになるのである。またその反面、

この書簡集からはフロイトが『夢解釈』ですべてを語ってはいなかったことも読み取ることができる。たとえば、『夢解釈』で最初に分析されるフロイトの「イルマの夢」の背後には、婚約者マルタが隠れていることが『婚約書簡』から明らかになるのである。

書簡でフロイトは医師としての日常生活についても詳しく報告している。そこからは当時の医療制度について、多くを知ることができる。また、フロイト伝では、一般に研修医時代のフロイトの師として、当時の偉大な脳解剖学者にして精神科医マイネルトの名が挙げられているが、フロイトの書簡はそのマイネルトとの関係も明るみに出す。フロイトは確かにマイネルトを脳解剖学者として高く評価していた。しかし、精神科医としては「凡庸」であると書きつけている。そして、のちの精神分析の展開からすると不可思議なことにも思えるが、そもそもこの時期のフロイトは精神医学や精神病患者にはほとんど関心を向けてはいないのである。フロイトは正規の医師となるための研修に没頭し、また、研究面では、神経学、とりわけ、プレパラート作成の新技法の開発に熱中していた。いまだ確固とした方法論の定まらない精神医学よりは、実証主義的研究の可能な神経学に関心を向けていたのである。また、フロイトと言えば、医学界の異端児であったというイメージが強いが、少なくともこの当時の研修医としてのフロイトは、同僚と常識的な付き合いをしていたことも手紙からうかがえる。

さらに、フロイトは自分の読書についてもマルタに書き送っている。とりわけ、ダーンの『オーディンの慰め』という小説は大きな意味をもつ。フロイトはここに自分の「秘密」が隠されているとマルタに書く。そして、この小説にはオイディプス・コンプレックスに直結する内容や、1913 年の論文「小箱選びのモチーフ」の死生観に結びつく内容を読み取ることができる。この書簡集にはすでに後年のフロイトの思想の萌芽が見いだされるのである。

この書簡集のもっとも大きな価値は、すでにマルタとの書簡のやりとりにおいてフロイトの自己分析が始まっていることが明らかになるという点にある。フロイトは、マルタへの激しい愛と嫉妬に翻弄されながら、そのさなかに自らの心の動きを分析している。まさに『婚約書簡』において精神分析が胎動しているのである。そのことを明らかにしたのが本研究の後半部の最大の成果である。

『婚約書簡』は全 5 巻中 3 巻までが刊行されており、今後第 4 巻、5 巻の出版が待たれるところである。今後はさらにこの書簡集の研究を続ける所存である。しかし、第 3 巻までの研究でも、これまでの精神分析成立史に大きな変更をもたらす成果が上がったものと確信する。

ウィーン大学生時代に厳密な実証主義を身につけたことが精神分析の基盤的な土壌

であり、そして、その後、恋愛体験の中で心の不条理を自ら体験したことにより、その土壌から精神分析が芽生えたのである。本研究はそのことを明らかにした。これはこれまでのフロイト研究にはなかった新たな発見である。

本研究期間中には、さらにフロイト精神分析研究にはなくてはならぬ書、シュレーバーの『回想録』の改訳を刊行した。これは精神分析と精神病（パラノイア）の関係を考察するうえで最重要の文献である。これを改訳刊行したことは、学界への意義深い寄与となった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

1. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(五) 精神分析の胎動」『岡山大学文学部紀要』、第 69 号、査読無、2018 年 7 月、印刷中
2. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(四) 精神分析の胎動」『岡山大学文学部紀要』、第 68 号、査読無、2017 年 12 月、1-15 頁
3. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(三) 精神分析の胎動」『岡山大学文学部紀要』、第 67 号、査読無、2017 年 7 月、1-18 頁
4. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(二) 精神分析の胎動」『岡山大学文学部紀要』、第 66 号、査読無、2016 年 12 月、1-14 頁
5. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について(一) 精神分析の胎動」『岡山大学文学部紀要』、第 65 号、査読無、2016 年 7 月 33-48 頁
6. 金関猛「始まりの前のフロイト(二)」『岡山大学文学部紀要』、第 61 号、査

読無、2014 年 7 月、23-35 頁

7. 金関猛「始まりの前のフロイト(一)」『岡山大学文学部紀要』、第 60 号、査読無、2013 年 12 月、21-38 頁

[学会発表](計 5 件)

1. 金関猛「フェーリクス・ダーン『オーディンの慰め』を読むフロイト 『婚約書簡』から浮かび上がる死生観」、 「金関猛(岡山大学教授)講演会」、2018 年 2 月 19 日、東京都渋谷区、國學院大學渋谷キャンパス)
2. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』について 精神分析の生成」、日本独文学会秋季研究発表会、2017 年 9 月 30 日、広島県東広島市、広島大学総合科学部
3. 金関猛「ジークムント・フロイト/マルタ・ベルナイス『婚約書簡』と『夢解釈』の「イルマの注射の夢」をめぐって 精神分析の萌芽」、第 65 回日本独文学会中国四国支部研究発表会、2016 年 11 月 5 日、香川県高松市、香川大学
4. 金関猛「フロイトとニーチェ ヨーゼフ・パーネトを介して」、第 63 回日本独文学会中国四国支部研究発表会、2014 年 11 月 15 日、岡山県岡山市、岡山大学
5. 金関猛「ウィーン大学生フロイトの研究」、第 62 回日本独文学会中国四国支部研究発表会、2013 年 11 月 2 日、愛媛県松山市、松山大学

[図書](計 2 件)

1. D. P. シュレーバー著『シュレーバー回想録』(尾川浩・金関猛共訳) 中央公論新社、全 586 頁、2015 年 10 月
2. 金関猛『ウィーン大学生フロイト 精神分析の始点』(単著) 中央公論新社、全 287 頁、2015 年 3 月

[産業財産権]

出願状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等
無し

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金関 猛 (KANASEKI, Takeshi)
岡山大学・社会文化科学研究科・教授
研究者番号：20144727

(2) 研究分担者

無し

(3) 連携研究者

無し

(4) 研究協力者

無し